

バラモンの諸相

茨田 通俊

古代インドの社会階級を示す四姓のうち最高位に位置するバラモン (Skt., Pali *brāhmaṇa*; AMg. *mahaṇa, bambhaṇa*) は、同時にヴェーダの權威を認める正統バラモン系の修行者を指す名称でもあり、自由思想家としての沙門 (Skt. *śramaṇa*; Pali. AMg. *samaṇa*) と対立する概念として捉えられるものである。正統バラモン思想とは異なった沙門の思想において、バラモンという語はどう捉えられたのか。当時沙門の宗教の主流であった仏教とジャイナ教の伝える文献に、その点を求めてみたいと思う。

バラモンを表すアルダマーガデー語のうち *mahaṇa* については、注釈において、禁止を表す副詞 *na* と *han-* (殺す) が結合してできた語であると通俗的な解釈を行っている。また、仏教文献においても *bāhīpāpa* (悪を除いた) に音が似ていることをもって、*brāhmaṇa* の語義解釈としてゐる (Dhp. 388)。仏教もジャイナ教も正統バラモン思想にとって異端的な自由思想、沙門の宗教であったにもかかわらず、バラモンという語に対して、以上の通俗的解釈からは否定的な態度は窺えない。

原始仏典、ジャイナ教聖典に見られる諸例によれば、バラモンの様相は多岐にわたっていることが知られる。まず、最古層の文献では、ゴータマ・ブッダ及びマハーヴェーラのことをバラモンと呼ぶ例が存在する (Sn. 356; Ay. 1-8-14 etc.)。初期の文献に見られるこうした用例は、ヴェーダを信奉する正統バラモン系

統の宗教が力を有していた時代に、仏教やジャイナ教がそうした權威あるバラモンの名を借りて、自らの宗教の開祖を呼んだものと一般に考えられている。

また、Dhp. の *brāhmaṇa-vagga* (Sn. に平行句あり) と、やはりバラモンについて書かれたジャイナ教の古層聖典 Utt. 第25章との間に幾つかの平行句が存在することが、J. Charpentier によつて指摘されている (Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes XXIV, ss. 68-69)。これらの平行句では、不殺生、無所有等を実践する理想的修行者としてのバラモンの姿が描かれている (Dhp. 405, 409, 401, 404; Utt. 25-23, 25, 27, 28)。さらに、人がバラモンであるのは、出生によるのではなく、その行為の内容によるという、バラモンの意味の転嫁が行われている。つまり、バラモン教社会を支える階級差別を否定し、身分の区別は行為の如何によつて決定すると主張しているのである (Sn. 136 = 142, 650; Utt. 25-33)。これらより真のバラモンとは、四姓の最高階級でも正統バラモン系修行者でもない、理想的人格者を意味していることが知られる。

仏教やジャイナ教の文献において、こうした真のバラモンが問題とされる背景には、当時のバラモンの腐敗した生活、墮落した実態があったことは見逃せない (Sn. 140; Utt. 12-14 etc.)。確かにこの当時仏教やジャイナ教では、バラモンという語を徳の優れた者、理想的人格者を指すものとして用いていたが、その一方で、墮落したバラモンに対する批判も強かったようである。先の Dhp. や Utt. 等初期の文献に見られる真のバラモンに関する例などは、墮落したバラモンに対する非正統バラモン系宗教の側からの批判と受け取れよう。

仏教文献には、バラモン教、ヴェーダに関する語や表現が存在するが、これについて仏教的なものへの解釈の展開が見られる。たとえば、仏陀とバラモンとの問答の中で、バラモンの主張では三ヴェーダを意味する三つの明知 (三智) について、仏陀はこれを宿命通、天眼通、漏尽通として、仏教的な解釈を与えている (SN 7-1-8)。本来バラモン側に関係する語を使用する際に、仏教的な意味への転換が図られているのである。

次に、バラモンという語が沙門と結び付き、「沙門バラモン」(Pali *samāna-brahmaṇa*; Awg. *samāna-mahana*) としてひとつの結合句を形成する場合や、両方の語が並記される場合がある (Sn. 441; Sūy. 1-1-1-6 etc.)。こうした用例では、バラモンは、正統バラモン系の修行者でも理想の修行者でもなく、不特定の修行者、思想家の意味で用いられている。ここでは、バラモンと沙門の立場の違いは考慮されていない。

また、成立が比較的新しく、表現の定型化が進んだジャイナ教聖典の散文箇所では、もはやバラモンはそうした定型句の一部として現れるのが大半である (Āy. 2-1-1; Thān. 3-1; Vy. 1-7, 5-0 etc.)。一方原始仏典の散文では、固有名詞を付されたバラモンが仏陀と問答し、その結果仏陀に帰依する、という形式が発達する。こうした構図は、明らかにバラモンの社会的な地位が低下したことを示すものである。

ところで、原始仏典、ジャイナ教聖典に見られるバラモンの意味用法を分類した場合、祭祀を司る職業集団としてのバラモンの用例は数少なく、バラモンは圧倒的に修行者として現れることが多い。バラモンは、本来ヴェーダ聖典による祭祀に従事する者であったが、ウパニシャッドの時代に入ると、アートルマンのような

人間の本質的課題の追求に努めるようになり、出家主義に立つ仏教やジャイナ教等の非正統バラモン系の諸宗教の出現と相俟って、世俗の務めを終えた後出家遊行の生活に入る者が現れた。仏教やジャイナ教の文献において修行者バラモンが頻出するのは、当時の社会にバラモン系の修行者が数多く存在したことを物語っていると思われる。

原始仏典でもジャイナ教聖典でも成立の古い文献では、開祖をバラモンと呼ぶ等バラモン教の権威を借りた表現が見られた。同時に古層聖典の中には、墮落したバラモンに対する厳しい批判もあり、それが真のバラモンとは何かという仏教なりジャイナ教なりの主張となって現れたのである。一方比較的新しいものになると、表現の定型化が進み、バラモンは単に一修行者に過ぎないものとしてしか描かれなくなる。文献資料の新旧の層の扱いに関する点と、非正統バラモン系の文献に描かれたため多分に脚色があることを考慮しても、概ね当時の社会におけるバラモンの相対的な地位の低下がこれらの文献の記述にも反映していると言える。また、仏教やジャイナ教といった非正統バラモン系統である沙門の宗教も、バラモン教を真っ向から否定したのではなく、立場の異なる両者が互いの文化を取り入れ、影響しあいながら、その中で非正統の自由思想家が次第に勢力を拡大していったとみるのが妥当であろう。

【略号】

Āy.	Ayāraṅga	Dhp.	Dhammapada
SN	Saṃyutta-nikāya	Sn.	Sutta-nipāta
Sūy.	Sūyagadāṅga	Thān.	Thānaṅga
Utt.	Uttarajjhāyā	Viy.	Viyāhapannatti